

六働きは
フクじゃ
ないヨ

共働きはラクじゃないヨ



草土文化

早乙女 勝元（さおとめ かつもと）は作家、東京下町の生まれ。高小卒で、下町の工場労働者として働きながら文学を志し、作家生活に入る。作品は『早乙女勝元長篇選集』（全12巻・理論社）『わが街角』（新潮社）『東京大空襲』（岩波新書）『ベトナムのダーちゃん』（童心社）、ほかに共働きの記録として『輝坊といっしょに』（新日本新書）『親になったが運のつき』（朝日新聞社）など。日本文芸家協会会員。

共働きはラクじゃないヨ

一九七四年 五月一五日 第一刷発行
一九七八年 二月二〇日 第九刷発行

著者 © 早乙女勝元

発行者 田 辺 徹

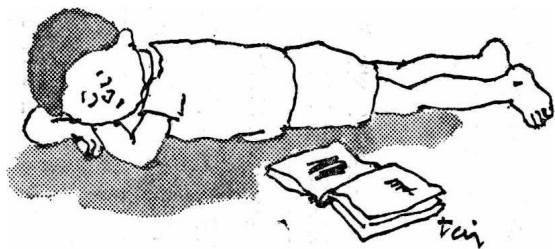
印刷所 光 陽 印 刷

製本所 梶 田 製 本

発行所 株式会社 草土文化

東京都千代田区五番町一〇一六
電話（二六四）〇六三一（代表）
振替 東京 四六一二二

も
く
じ



共働きはラクじゃないヨ

1

「保育園ボス」といわれた輝が、やっと小学校へ入ってくれたが、お昼で「ただいま」とこられては、ぼくの仕事もあがったり。おまけに、彼の成績表ときたら……。

ピッカピッカの定期入れ（二年四月）／8 第一日目の大失敗（五月）／15 プカレストからの手紙（六月）／22 兄弟ゲンカ両成敗（七月）／30 パツとしない通信簿（八月）／37

7

2

二人の子どもたちが、もうチョットで手をはなれかけるといふのに、町にはまたボウリング場ができるとやらで、作家も大忙し。さらに三人目だなんて、残酷な。

45

夏休みが終って（九月）／46 家内兼主夫兼そして作家（十月）

3

／53 遠足の日はずらい（十一月）／59 託児所つきのボウリング場（十二月）／66

お出ました、女の子だ。女子の誕生は、父親にとって、なんとなくおもはゆいもの。愛と名づける。これで一家中、豊かなラブにめぐまれたら、もうけものだ。

仮面ライダー、空へ（翌年一月）／74 並んでオシッコかけた（二月）／82 女の子のお出ました（三月）／89 おしろいつけてやったのさ（四月）／98 家から追いだされたばく（五月）／105 Tのやつが、いきなりガットンと（六月）／112 二本の注射でふうらふら（七月）／118 すべりこみセーフ（八月）／126

4

赤んぼうのおむつを取りかえながら、ベトナムの母と子支援の運動にとりくんたら、家中みなグロッキー。子どものいない友人が、ねたましくもうらやましい。

ダーちゃん手紙（九月）／136 五時だ、モウ朝がきた！（十月）

／144 やった、バカボン！(十一月)／151 豊ちゃんが車にハ
ネられた(十二月)／158 民、カレーをぬすまれるの巻(二翌
年一月)／165

共働き十一年目。見るユメは、独身のころ、ぼくのま
わりにひしめいていた娘たちのことばかり。目がさめる
と、三人の子どもの寝顔に、がっくりときて……

お話はテープレコーダーで(二月)／174 共働き十一年目の悲
哀(三月)／181 アーチャン保育園に(四月)／189 ごきげん上
上です(五月)／195 糸のきれたタコみたいに(六月)／202 乱
視と力不足の十年目(七月)／218

共働きと共稼ぎとはちがう。経済的なものよりも、さ
らに積極的な意味を見つけて、ねじりハチマキできたの
だが、それでもやはりラクじゃないよ、共働きは。
……………

お酒ばっかし飲んだと(八月)／210 おなじ働く女性なのに

(九月)／226 えへらえへらのおとう(十月)／234 ワイワイガ
ヤガヤの安息(十一月)／246 この冬は積極作戦で(十二月)／
249 長いようで短かった三年間(翌年一月)／257

子どもたちに与えたい強さとやさしさ／266

カット	安	泰
写真	鈴木	進次
装幀	坂口	顕

11

「保育園ボス」といわれた輝が、やっと小学校へ入ってくれたが、お昼で「ただいま」とこられては、ほくの仕事もあがったり。おまけに、彼の成績表ときたら……。



ピッカピッカの定期入れ（一九七一年四月）

「お客さん、キップ、キップ！」

改札口の駅員にそう呼びとめられて、ぼくはあわててふりむき、

「あつ、そうか」

なんとまあ、キップを切ってもらうのを、忘れていたのだ。

それというのも、今日は長男輝てるの小学校の入学式。電車に乗って通学するわが子の定期に氣をとられて、こちらのほうがうっかり、というしだいなのである。なにしろ、輝のやつときたら、駅が目に入るや、

「おとうさん、ぼくの定期」

と、自分の手に新しいピッカピッカの定期をにぎりしめ、改札口を入ったとたん、その定期をぴゅつと駅員の鼻先につきだしたものだから、若い駅員は、おどろいてのけぞった。

きのうまでは、どこへいこうが、親についてきさえすれば、乗物はみんなタダ。六歳になった

輝と、もうすぐ三歳になる民たみと、親子四人であちこち旅行しても、キップは大人二枚でよかった。

ところが、今日からは、大人二枚に子ども一枚。ああ、また出費がかさむな、と貧乏作家のぼく

は、あわれにも、そんなことを考える。だが、もうこの子のキップ代をケチるわけにはいかな
いだろう。あんなに誇らしげにびゅっとさしだした定期に、子どもの世界に入った彼の自負が
ある。

「でもよ、輝坊のこと、さあどうぞと小学校でいれてくれるかな。いれてくれなかったら、ま
た保育園の乳児組に戻るとするか」

電車の中で、からかっていえば、

「おとうさんたら、まただまかす。おれ、一年生。保育園はタミちゃん！」

「民公のやつ、園でチャンがいなくて、さびしがつてるだろうなあ」

「へいきだよ、タミちゃん、みんなとあそんでるよ」

チャンというのは、二男坊の民が、兄き分をよぶときのことばだ。

「輝坊は、これから毎日、おかあさんといっしょに、電車に乗れるってわけだな」

「うん。おれ、でんしゃだ。でんしゃで学校へいくんだぞ」

輝は、うれしそうにいう。

ぼくは、腕時計を見る。午前九時二十分。それでも、電車はかなり混んでいる。入学式は十時
からだから、きょうだけはのんびりできるわけだが、明日からはラッシュ、押すな押すなの満員
電車。その京成電車に乗って、輝はとなりの墨田区の小学校へいく。大丈夫だろうか。まさか、

押しつぶされるようなことはないにしても、片道十五分の乗物と、徒歩二十分。往復でざっと一時間半。早生まれの小さなからだの輝には、ずいぶんとたえることだろう。

なにしろ、大の男だって、へとへとくたくたになる通勤ラッシュなのだ。

そのラッシュにもまれながら、ぼくは、生まれたばかりの輝坊を背にしよって、何度、向島の母の家へ、この子をあずけにいったことだろう。電車が駅へやってくるたびごとに、一体どのくらい大勢の乗客が、このドアに殺到してくるかと、ドキドキしながらかよったことを思いだす。

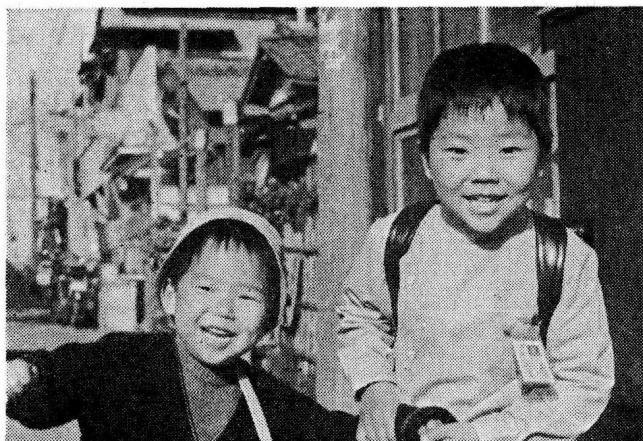
その輝坊が、小学校へあがる。

ああ、ついに……という思いがある。だが、「おめでとう」と人にいわれても、ぼくの顔はそれほど晴れない。またひとつ、新しい悩みが増えたのだ。

もちろん、できることなら、もよりの小学校へ入れるにこしたことはないだろう。ちょうど、ぼくのマッチ箱みたいなボロ家の鼻先に、小学校がある。もっけのさいわいだ。それを、なんだって越境してまでよその区の小学校へ通学させるかといえば、理由はひとつ。学童保育がねらいなのである。

すぐ前の小学校に、なんとかして、“学童保育クラブ”なるものを作ってもらおうと思い、ぼくは、昨年いっぱい足を棒にして、その設置運動に町中をとび歩いた。町内会の協力も得て、千五百五名からの署名をそろえ、葛飾区議会に請願したのだが、結果はあえて書くまでもないだろ

さあ出発だ！
入学式の日、輝と、保育園へ
向かう民



う。わが子の入学にはまにあわなかったのである。

この種の運動は、子どもが、まだ赤んぼうのうちからやらなければ、だめなのだ。ちょうどぼくたちが、輝を保育園に入れるために、生まれる前から福祉事務所へ交渉していたように……。

といっても、もよりの小学校に入学した輝が、「ただいま」と、お昼にかえってこられては、どうしようもない。ぼくの商売はあがつたりだし、この町には、子どものおそび場はないのだ。やむをえず輝は、ぼくの彼女直枝君が音楽教師として勤務している墨田区の第一寺島小学校へ入学することになった。この学校には、さいわいに学童保育クラブがある。指導員がいる。家にかえってもだれもない子どもたちに、集団のおそびを提供してくれる。それを、めざしたというわけなのだ。

しかし、ラッシュでかようには、それなりの用意を

しなければならぬ。まずランドセルが問題だった。がばちと、カブト虫のようにもりあがつたやつでは、電車の中でこずかれることだろうし、トラックにひっかけられる危険性もある。すると、ちょうどMデパートが、オリジナル商品として、「背中にびったり吸いつく」軽量の新型ランドセルを売りだした。ぼくは、まさきにかけてつけた。ところが、なんと、おネダンは、八千円也。目から火の出るような思い。しばらく思案した末、でも思いきって買ってかえれば、「ヘンテコリンなかばんだな、べったんこじゃないか！」と、輝は、浮かぬ顔である。

「べったんこだって、上等なのよ」

という彼女の口は、子どもよりもとがっている。

「ぼく、上等でないほうがいいな。ヨッちゃんみたいの」

「ちえッ」

小説家のぼくだって、いま着ている上着なんか、季節はずれの大バーゲンの品物だ。オープンシャツも、おなじ。着ているものを全部合計しても、このランドセルの金額までいかないというのに……まったく、親にはなりたくないものである。

入学式には、黒紋つきに白たび、頭を烏帽子えぼしみたいにもりあげたおくさま方でにぎわい、また子どもたちは、みな申しあわせたように、蝶ネクタイに背広の小紳士だ。ジャンパー姿の新入生

は、うちの輝ぐらいなものか。

六年生の歓迎の合唱。エレクトーンの伴奏をするのは、三十歳をこえたところがかりしているうちの彼女である。新入生の輝坊は、さぞかし、めんくらったことだろう。母親が教師をしている学校へ、わが子を入れるマイナス面はわかりきっているのだが、当分の間はしかたがないと思う。一日も早く、もよりの小学校に、学童保育クラブを作るべしだ。

校長先生が、挨拶にたった。

この一年間に、本校の児童八名が交通事故にあったので、くれぐれも交通安全には気をつけてくださいとのこと。その八名の児童の犠牲には死者もふくまれている。なんとなく聞き流してしまえば、それっきりのものだが、あとで各教室にわかれた子どもたちが、先生からどっさりともらってきた品物を見て、さすがのぼくもキモをつぶした。

教科書。PTAからの紅白のもち。これはけっこうである。ほかに、交通安全のワッペン（血液型を書きこむ）。「こうつうきそく」の書かれた下じき。学童交通安全手帳。「あぶない、とびだし、よいこはしない」のカードつき折鶴のお守りと鉛筆。向島警察署のしおり「みんなでふせよう踏切事故」。いけないことずくめのきまりばかりで、さらにいかめしい名札、黄色い帽子までふくめるとなると、これは一体どうなっちゃってんだらう。

「子どもにとって、本当に『入学おめでとう』といえるものは、なんにもありやしないのね。

ただ自分の命を守れ守れ、あとは知らんぞ、っていうばかりじゃないの」

という彼女のことばに、ぼくはうなずく。眠れないほど緊張し、目を光らせて入学したわが子
を待ちうけていたものは、これだったのか。実にきびしいといわなければならぬ。

「なんだか、ほら、戦争中を思いだしちまうなあ。当時のおれたちは、防空頭布で頭をすっぱ
りつつみ、胸には、学校名に住所、氏名、血液型をしるした認識票をべたべたとはりつけて、万
が一のときにそなえたもんだが……」

「いまは、交通戦争、公害戦争の時代になってきたのかしらん」

「ということらしい」

「ユーウツねえ」

「なのに、もらってきたPTAの規約を見てみる。『児童の幸福な成長をはかり、福祉を増進す
る』とある。なんてアイマイで、抽象的な目的だろう」

「一年に八人もの子どもが、具体的に、事故にあっているのに」

「要するに、地方自治体もPTAも、それほど積極的に子どもへの危険を取りのぞいてやるとい
う姿勢じゃないんだよ。危険はさけて通れ、というだけさ。そのうち町中が危険だらけになって、
通る道もなくなり、いくところもなくなるんじゃないか」

「……」